

この人の眼は厳しい。
しかし、優しい。
200号講座から2年ぶりの
「里帰り」エッセーです。
(編集部)

順番

東大教授 中村 圭介



なかむら・けいすけ
1952年福岡県生まれ
東京大学経済学部卒
経済学博士
東京大学社会科学研究所教授
(主要著書)
『教育行政と労使関係』
(2001年・エイデル研究所)
『変わるのはいま 地方公務員改革は
自らの手で』(2004年・ぎょうせい) 他

40年前の上野駅と30年前の日光華
敵の滝。

過去のある一瞬を映し出す画像が、
ふとしたきっかけでよみがえってく
ることがある。モノクロのこともあ
るし、カラーのこともある。ほんや
りとしていることもあれば、鮮明な
こともある。連続画像の時も、一枚
だけの時もある。

自分しかみることのできない、記
憶の中のマイ・アルバム。上野駅も
華敵の滝も、そうした僕のアルバム
に収められている。

上野駅を写したのは小学生の僕。
華敵の滝は大学生の僕。わずか10年
とはいえ、その違いは大きい。二つ
の画に共通するのは長い列。そして、
割り込み。

水上温泉に行くために、僕たち一

家は上野駅のホームで並んでいる。
一家5人の他に、陽気なアメリカ人、
ウエルチおじさんもいる。

オレンジとグリーンの急行列車が
ホームに入ってくる。前と後ろのド
アが開く。先頭の人から、順序よく
乗り込んでいく。

とその時、ウエルチおじさんが、
列を離れた。開けっ放しになってい
る窓に近寄っていく。何をするんだ
ろうと見ていると、おじさんは、そ
のまま窓から列車に入り込んだ。白
昼堂々の割り込みである。思いもよ
らない、あっと驚く割り込みである。

敵ながらあつぱれ。僕たち一家はち
ゃんと順番どおりに列車に乗り込み、
ウエルチおじさんが確保(?)して
くれていたボックス席に座った。
その時の画像はない。父や母がど

んな顔をしていたのか、周りの人々
はどんな目で僕らを見ていたのか。
残念ながらというべきか、あるいは
幸せなことというべきか、小学生
の僕は写してはいない。ただ一つ、
3歳ちがいの姉のひどく怒った顔の
画はある。列車が動き出した後、ふ
と姉に目を移したら、ひどく怒って
いるのがわかった。

「あ、おねえちゃん、おこっている。
そう感じて、同じ姉弟として、少し
不安になった。

思春期の姉が、ウエルチおじさん
の突飛な行動に恥ずかしくなったの
かもしれない。なにしろ、列車の窓
から入りこんだのだ。あれほど、目
立つ行動はない。

あるいは、ウエルチおじさんが「割
り込んだ」こと、順番を守らなかつ

たこと、父や母もそれをとがめるこ
とはなかったこと、そうしたことに
腹を立てたのかもしれない。

今となつては、僕にもわからない。
ただ、怒っている姉の顔だけは、ほ
んやりとではあるけれども、アルバ
ムに残っている。

華敵の滝は下から眺める。そうす
ることで、この水煙たつ豪快な滝を
堪能できる。下にある展望台までは
エレベーターで行く。

エレベーター前には長蛇の列。かな
りの時間、待つ覚悟が必要だ。
30年前の父と僕は辛抱強く並んで
いる人々を横目に、エレベーターへと
向かっている。係員が僕たちを案内
しているのだ。VIP待遇である。
今から思えば、僕たちを先導して
いたのは、おそらく、東武鉄道関係

の組合役員ではなかったか。なぜ、
僕たちがVIP扱いされたのか、い
やそもそも、なぜ日光にいたのかも
覚えていない。

あつげにとられたように僕たちを
見ている人々。あからさまに非難の
目をしている人々。興味深そうに、
係員に先導された僕たちを眺めてい
る人も、少ないけれど、いる。

大学生の僕は、その人々の表情を
しっかりと写している。
僕はとても居心地が悪かった。途
中で下を向いてしまった。だから、
あとは何も写していない。ちらっと
見たら、父も居心地が悪そうだった。
東武の関係者が、親切心で、割り込
ませてくれたのだと思う。彼らにす
れば、お世話になつている(その内
容は僕にはわからない)父に、ちょ
っと便宜を図ってあげただけなので
あろう。だが、居心地の悪さは、今
もなお僕の中では続いている。

長い列、割り込み、そしてちょつ
ぴりの不安あるいは居心地の悪さ。
これらをキイ・ワードに僕のアルバ
ムをさらに検索してみても、なにも
画像は出てこない。ちょつぴりの不安、
居心地の悪さを感じることがいやで、
割り込みをしなくなつたのか。ある
いは長い列に割り込んで、昔のよ
うに感じるものがなくなつたのか。

絶対、前者だと言
いたいのだが、後
者かもしれない。
なせ、このごろ、
とみに記憶力が衰
えた。今のことは
すぐ忘れる。
去年の暮れの成
田空港。僕はジャ
カルタからバリの
空港経由で成田に、
早朝に着いた。入
管は長蛇の列。朝
が早く眠りも十分
ではない上に、夏
のジャカルタから
真冬の東京である。
誰もがいらだって
いるのが感じとれ
る。「もつとてき
ばきしろよ。僕ら
は悪いことなどし
てないのだから、
顔パスでいいじゃ
ないか」などと無責任にも思っ
てしまう。

僕が並んでいる列に、3人づれの
ビジネスマン(服装でわかる)が割
り込んだ。思わず、「そりゃーない
だろう。僕らはちゃんと並んでいる
んだから」と、叫んでしまった。「え



1つ、ここは最後尾じゃないのか、
あつちの列にいこう」と周りに聞
えるように言つて、列を離れた。「な
に、わかつているくせに」。これは
僕の心の中の声。
ビジネスマンの次は、3人づれの
親子。堂々と割り込んできた。

その時、妙齢のご婦人がお父さん
に近寄り、「みんな並んでいるんで
すよ」とやさしく語りかけた。

お父さん「急いでいるんだ」。す
ると、2、3人の男性から、「みん
な急いでいるんだ、ちゃんと並べ
」との声がかかった。僕がなにごと
か言う必要もなかった。お母さんと娘
さんは、お父さんを引っ張りに来る
ちゃんと並ぼうと。お父さんは列か
ら離れたものの、周りをものすこ
いでにらみつけている。「睨め回す」
とはこのことかと思つた。

お父さんは格好悪かった。お父さ
んも居心地の悪さを感じていたはずだ。
僕のそれとは違うものを。

列をつくる。順番を守る。簡単な
ことである。皆が普通に当たり前の
こととして、それを守ろうと考えて
いさえすれば。

もちろん、破るのも簡単である。
そんなつまらんことに目くらまを立
てるなど言われるかもしれない。だが、
簡単な、幼稚園児でも素直にしたが
う基本的なルールさえも守られない
社会はいったいどんな社会なのだろ
うか。そうした社会で、もつと複雑
なルールが守られるはずだというの
は幻想に過ぎない。日本の社会はだ
いじょうぶだろうか。

長崎通信 No. 222
2006.05